発明家のバグ

青井ハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
発明家のバグ

【Ｎコード】
Ｎ２３５０Ｅ

【作者名】
青井ハナ

【あらすじ】
小さな星の小さな発明家バグ。彼の夢は周りのみんなを幸せにする発明家になること。バグはみんなや星の夢を乗せて発明家として急成長していく。しかし、発明家として世間から騒がれるようになるにつれバグの夢は一人歩きを始め…

第1話：小さな発明家

その星は小さな小さな星でした。
朝になると海はコバルトブルーにキラキラと光り、夜になると満点の星が夜空を覆い尽くします。その星に、一人の発明が大好きな少年がいました。少年には両親がいませんでしたが、みんなは少年のことをバグと呼び家族のように大事にしていました。バグもみんなが大好きでした。
ある時、バグが学校の発明大会で一位になりました。バグを育ててくれているおじさんとおばさんは、手を叩いて飛び跳ねながら大喜び。おじさんはバグの頭を大きな手でなでると、こう言いました。
「バグ。おまえの発明はおじさんとおばさんを幸せにするんだよ。おまえは発明することが好きかい？」
バグはこくりとうなずきました。
「そうかそうか。なら、今日からおまえのことを発明家のバグってよぼう。おまえならきっと、みんなを幸せにできる最高の発明家になれるよ。」
その時から、バグの夢はみんなを幸せにする発明家になることになりました。

第2話：初めてのプレゼント

もともと発明が大好きなバグは、みんなを幸せにしたいという夢を見つけたことで、もっともっと発明が大好きになりました。
バグの頭の中はいつも発明のことでいっぱい。朝起きてからも、学校から帰ってきてからも、夜ご飯を食べているときも。学校でも発明のことを考えていてぼんやりとしてしまい、先生に叱られることもたびたびです。
またある時は、学校から帰ってきた途端に部屋にこもって朝まで出てこなかったこともありました。
おじさんとおばさんはそんなバグを心配することはあっても、けっして怒ることはしませんでした。二人はバグの夢が叶うことを心から望んでいました。そしてバグにはその才能があることもわかっていました。
バグは最近料理の味つけがうまくいかないと悩んでいるおばさんに、一振りで料理がとっても美味しくなる不思議な粉をプレゼントしました。腰が痛いと顔をしかめているおじさんには座るだけで腰の痛みがスッキリとなくなる特別な椅子をプレゼントしました。
二人は大喜びして、バグを抱きしめて言いました。
「バグ、ありがとう。おじさんとおばさんはこれだけでもう十分幸せだよ。」
心から喜んでくれた二人を見て、バグもすっかり嬉しくなってしまいました。

その後は腰の痛みがとれたおじさんと一緒に海に行き、二人でつかまえた虹色の魚を、おばさんがとびきり美味しい料理に仕上げて、三人で楽しい楽しい夕食会をしました。
バグの初めてのプレゼントはおじさんとおばさんを幸せにすること

に大成功しました。

第3話：大会での優勝

ついにバグの発明品が、大きな大会で一位になりました。その大会はバグの星だけではなく、いくつもの星から多くの発明家が参加する大きな大会でした。審査には色んな星から色んな先生が集まりました。中にはかつて偉大な発明をした人や、賞を貰った人もいました。その大会でバグの発明品は何と一位に選ばれたのです！

バグはまるで夢のようで、初めは信じられませんでした。しかし、周りのみんなが大喜びをして自分を取り囲み、「バグ、やったね！」「バグおめでとう！」とほめちぎるのを聞いているうちに、だんだんと実感がわいてきました。

その日の夜。おばさんはバグの大好きな特製シチューを作りました。おじさんが採って来た、この星で一番おいしいと言われているキノコもたっぷり入っています。大好きなシチューとおいしいパン、そして大好きな大好きな二人と過ごすお祝いの夜に、バグはすっかりはしゃいでしまいました。

おじさんとおばさんもそんなバグを見て、にこにこと嬉しそうに微笑みます。楽しそうに、そして幸せそうにはしゃぐバグを見て、二人も幸せでした。

でも、二人はバグとこのままいつまでも一緒にはいられないだろうということを、予感していました。

二人の予感は幾日もしないうちに、現実のものとなりました。

その日、バグが学校から帰ってくると、見知らぬ男の人が家にいました。その男の人はバグを見ると少し小さな目をめいっぱいに細めてにっこりすると、

「やあ、きみがバグだね？賢くて優しい目をしている。きみはきっと立派な発明家になるよ」

と言うと、バグの頭をポンとなでました。どっしりとした声と大きな体には似合わず、その手はとてもやわらかで温かく、バグはふと

緊張が解けるのを感じました。

第４話：悲しい予感

男の人はマグラといい、おじさんとおばさんと何やら話し込んでいる様子でした。バグは庭で空をぼんやりと眺めながら新しい発明品のことを考えていたので、三人が何の話をしているのかは全くわかりませんでした。バグが家の中に戻るとマグラはちょうど帰るところで、

「じゃあ、バグ。また会おう！」

とどっしりとした、しかしどこか陽気な声でバグにあいさつをすると、

頭をゆったりと下げて背中を丸めるようにしてドアから出て行きました。マグラにはおじさんとおばさんとバグの家のドアは少し小さいようでした。

バグはマグラの言った

「また会おう」という言葉の意味を考えました。どうしてまた会う必要があるの？なぜおじさんとおばさんはぼくを抱きしめるの？どうしてどうして…

不安な、予感にも似たこの気持ち。マグラの胸元に光っていたエメラルドグリーンのバッチ。

あのバッチは大会の時、偉い人達がつけていたそれと同じものであることをバグは思い出しました。聡明なバグには自分の身に何が起ころうとしているのかがわかりました。

「おじさん、おばさん、ぼくはずっと一緒にいるよ。ぼくはどこへも行かない。行きたくない！」

バグの突然の宣言におじさんとおばさんは驚き、顔を見合わせると、少し悲しそうな顔をしました。

その日の夜。
バグは久しぶりに大好きな発明のことを忘れて、大好きなおじさんとおばさんのことを考えながら眠れない夜を過ごしました。

第5話：旅立ち

翌日の日曜日。
バグが起きると部屋はもうおひさまの温かな光りでいっぱいでした。おそるおそる階段を降りて下に行くと、おじさんは出かける準備をしていました。
「バグ、やっと起きたね。さあ、朝ご飯を食べたら一緒に出かけよう！」
おばさんもにっこり笑って「バグ、おはよう。」と言うと、さっそくバグのために遅い朝ご飯の支度を始めました。

おばさんのこしらえたお弁当を持って、おじさんはバグを魚つりに連れて行きました。今日もこの星の海はコバルトブルーにキラキラと輝いています。
おじさんとバグは隣りに並んで座ると、静かに、ただのんびりと魚がかかるのを待っていました。

「バグ。この星が好きかい？」
おじさんはふいに口を開きました。
「もちろん。」
バグは答えました。
バグはこの星が大好きでした。特に、一度おじさんに連れて行ってもらった場所である光景を見てからは、尊敬の気持ちすらいだいていました。
その光景。
白や青の大きな鳥たちが優雅に飛びまわり、遥か空から溢れ出ているような青い水は滝となって流れ落ち、虹色の滝つぼを生み出していました。その滝つぼの真ん中の岩場には人魚たちがたたずみ、美しい歌声を谷間中に響かせていました。

まるでこの星の神秘やいのちそのものが形になったみたいだ、バグはそう思いました。

「バグ。発明を頑張ることは、おまえの大好きなこの星にとっても喜ばしいことなんだよ。」
バグは黙って聞いていました。

「バグ。離れ離れになるのはおじさんもおばさんもつらい。さびしいと思っている。でも、おまえが夢を叶えることが私たちの夢であり、希望でもあるんだ。もちろん、この星にとってもだ。」

バグは思い出しました。自分の夢はみんなを幸せにする発明家になることだったということを。
もっと頑張って素晴らしい発明品を作れば、幸せになる人達がいるかもしれない。
もっともっと頑張って立派な発明家になれば、自分を育ててくれたおじさんとおばさんを喜ばせることが出来るし、この星の役に立つことも出来るかもしれない…

バグは決心しました。
たくさん勉強をして、立派な発明家になってここに戻ってこよう。
今はつらいけど乗り越えれば、みんなも自分もきっと幸せになれる。

おじさんはバグの顔をのぞきこみ、その決意をバグの表情から見てとると、小さくうなずきにっこりしました。

そうしてバグは数日後、大好きなおじさんとおばさんとお別れをし、この星をあとにしたのでした。
バグの新たな挑戦が始まりました。

全てはその夢のために…

第6話：新たな星での第一歩

立派な発明家になるための第一歩は、まず新しい星の生活に慣れることから始まりました。
バグが入ることになった新しい学校は、発明家を育てることを主とした学校でした。
生徒の中には親が有名な発明家である子や、すでに大きな発明品をヒットさせている子もいましたし、先生たちの中にはマグラと同じエメラルドグリーンのバッチをつけている人もいました。

バグの住むところは、同じ学校のリドという男の子と一緒の部屋になりました。
リドは口数が少なく、いつも何か難しそうな本をもくもくと読んでいました。時々めがねを親指と人差し指で持ち上げるようにして直すのがくせのようだ、とひそかにバグは発見しました。
最初はリドとうまくやっていけるのか心配したバグでしたが、バグもすぐに自分の発明に打ち込み始めたので、二人が特に会話もせずにお互いの世界を持つことはすぐに自然なことになりました。

ある日の夜。
バグはむしょうにおじさんとおばさんが恋しくなりました。
マグラは時々バグに、おじさんとおばさんに手紙を書いてはどうかと勧めてくれましたが、バグは発明家として成長するまでは二人には連絡を取らないと決めていました。
コバルトブルーの海と満天の星空を思い出すと、バグの目には涙がじんわりと込み上げてきました。
布団の中に隠れるようにして、バグは泣きました。
その声はかくしていたってリドにも聞こえていたはずでしたが、翌朝リドは何も聞いては来ませんでした。

バグが学校に入って半年がたつ頃、年に一回の発明大会がやってきました。
去年の優勝者を聞いてバグは驚きました。なんと、リドだったのです！
さすがいつも難しそうな本を読んでいるだけのことはあるな…
バグは素直に感心し、リドを新たな尊敬の気持ちを持って見るようになりました。

しかしバグも負けてはいられません。この大会でもし三位までに入れたらおじさんとおばさんに手紙を書こう、バグはそう決めていました。

さあ、一体どんな発明品を大会に出したらいいものか…バグは真剣に考えました。
何を作ったらみんなが幸せになるだろう。
何を作ったらおじさんやおばさん、星のみんなは喜ぶだろう。
バグは夜も寝ないで考えました。
何日か考えた結果、バグはひらめきました。

答えはバグの中にあったのです。

第7話：小さな発明品

さあ、学校で年に一度開かれる発明大会。
バグの発明品は何位に入れるでしょうか？

発表の日。
バグは不思議とドキドキしませんでした。
なぜなら、今回の発明品はバグの大好きなものをかたちにすることが出来たので、それだけでバグは大満足でした。

しかし結果は…
なんと三位に入賞することが出来たのです！
落ち着いていたバグでしたが、やはり三位に入賞したことは嬉しくて、マグラも良くやったと目を細めたくしゃくしゃの笑顔でバグの肩をだきました。

数多くの発明品の中でもひときわ小さなバグの発明品。
それは、コバルトブルーの一本の美しい万年筆でした。
しかし、もちろんただの万年筆ではありません。
バグはしばらく展示される予定であったその万年筆を、先生に許可をもらって一晩だけ持ち帰りました。

そしてその夜。
バグはその万年筆を使って、おじさんとおばさんに手紙を書きました。
部屋の電気を消し、万年筆のフタをとって白い便箋の上にペン先をさらさらと滑らせると、黒よりも深い、漆黒のインクで文字が紡ぎ出されます。
すると、部屋の天井に一つ二つと星が輝きはじめ、ついには満天の

星空になりました。
そして、周りには打ち寄せては返す静かな波音が聞こえはじめました。
それは、バグの大好きな大好きな星の静かな夜の景色でした。
星を出る時におじさんがおまもりにくれた、星の滝の水を詰めた小さなビン。
この水を使って、バグが一ヵ月かけて作った発明品がこの万年筆でした。
バグは星の夜空の月明りの下で、おじさんとおばさんに手紙を書きました。
もう涙は込み上げては来ませんでした。
大好きな二人はいつもこの同じ星空の下にいるのですから…。

ベッドで本を読んでいたリドはそっとページを閉じると、バグが手紙を書き終わるまでだまって、ただ静かに星の夜空を見上げていました。

バグの大好きな星とおじさんとおばさんへの思いを込めた一本の万年筆。
この発明品がバグの、いや、星のみんなの人生を大きく変えていくことになろうとは、この時のバグには思いもしないことでした。

第8話：きっかけ

バグの発明したコバルトブルーの万年筆。
これはバグが大好きな星のことを思い、星のみんなと自分のために考えついた小さな発明品でした。
しかし、この小さな万年筆が大きな展開を生む結果となったのです。

数日後。
バグのもとにマグラがやってきました。
マグラはバグのこの星での生活の手助けをしてくれていたので、時々バグのもとにやってきては話を聞いてくれたり、困ったことはないかと心配してくれました。
今日はマグラの来る予定の日ではなかったので、バグは少し驚きました。
マグラは
「やあ！」
といつものにっこりとしたバグの安心する顔で笑うと、実は・・・と話しはじめました。
マグラの話は、バグを驚かせるのに十分な内容でした。
バグのいる学校は発明学校なので、今回の大会の入賞作品は雑誌にのったり、発明がさかんなこの星では色々な場面で紹介されることがあります。
その中で、バグの発明品がとても話題になっており、問い合わせがたくさん来ているとのことでした。
そこまで話すとマグラは少しまじめな顔つきになり、バグに取材の申し込みが来ていることを伝えました。
バグはだまってマグラの話を聞いていました。
最後のほうはもうマグラが何を話していたのか覚えていません。
そのくらいバグには思いもよらない話で、それはバグののぞむこと

ではなかったのです。
マグラもそのことは良くわかっていたようで、落ち着いて少し考えてから答えを聞かせてくれればいい、そういうとその日は帰って行きました。

バグは悩みました。
もちろん有名になりたいなどとはこれっぽっちも思っていませんでした。
でも、自分の発明品がたくさんの人に知ってもらえれば、バグの美しい星のこともっと知ってもらえるし、おじさんもおばさんも喜ぶのではないだろうか・・・
それはバグにとってもうれしいことでした。
しばらく考えたバグでしたが、今回は取材を受けてみようと決心し、そのことをマグラに伝えました。

その時バグもマグラも、この小さな決断がのちに大きな波となって押し寄せてくることになるとは考えもつかなかったのです。

第9話：発明品の行方

取材を受けるとバグは、『小さな星から来た発明家のたまご』として、さらに注目されるようになりました。
バグがまだ若く未知の可能性をひめていることと、バグの星が小さく美しい星である、ということが人気の理由のようでした。

バグがこの新しい星に来るきっかけとなった大会での優勝作品や、今までの発明品までもが掘り返されて話題になりました。
しかし、やはり一番の注目は今回の学校の大会で三位に入った、コバルトブルーの美しい万年筆でした。
バグが自分と星のみんなのために作ったこの一本の万年筆。
今は他の星ではほとんど見ることのできなくなった満天の星空と静かな波の音は、人々の心を癒し、強くひきつけたのでした。

人々はこの美しい万年筆をぜひ手に入れたいと強く願うようになりました。
しかし、この万年筆はもちろん一本しかありません。
そこで、この万年筆をバグにたくさん作ってもらって、高価な値段で売ろうという話が持ち上がりました。
バグは今や取材におわれ、学校でも有名人になっており、ただでさえ大好きな発明をする時間が少なくなっていました。
その話をバグはまったく受けるつもりはありませんでした。
しかし、熱心にバグのもとに通いしきりに万年筆の作成をお願いする商売人や、バグのもとへ届いた手紙に書いてあるお願いを見ているうちに、ついにバグは作ることを決心してしまいました。
その万年筆を作るには、バグの星の滝の水が必要でした。
バグはマグラにお願いをし、星の滝の水をたくさん運んでもらいました。

おじさんとおばさんはバグの発明品が有名になり、バグが頑張っていることを喜んでくれている、とマグラから聞いてバグは安心しました。
それからその滝の水を使って、バグはコバルトブルーの万年筆をたくさん作りました。

バグの作った万年筆は売り出されると、あっというまに売れてしまいました。
すぐにまた、もっとたくさん作るように依頼がきました。
バグは自分の発明品が人々の役にたっているのだ、と思い頑張ってまた作りました。
しかしまたすぐに売れてしまいます。
しまいにはバグはもはや万年筆を作ることしかできなくなり、学校にもほとんど行くことができず、大好きな発明をする時間はなくなってしまいました。

それでもバグのもとには毎日たくさんの手紙が届きます。
万年筆を望む声や、万年筆を買って本当に良かったと喜んでいる人々の声を聞くと、バグは頑張るしかありませんでした。

だんだんとバグの頭は万年筆を作ることだけでいっぱいになり、学校にも行かなくなり、他の発明のことを考えることはなくなりました。
とにかくこれをたくさん作らなくては・・・
そのためにバグには助手がつき、万年筆をよりたくさん作るための機械を発明しました。
毎日星からたくさんの滝の水が運ばれてきます。
しかし、バグにはもう星の美しい景色やおじさんやおばさんの顔を思い出す余裕はなくなっていました。

バグは毎日毎日万年筆を作り続けました。

第１０話：届いた手紙

数年後。
バグの作る発明品は次々とヒットし、世に送り出されていました。
それらは全て人々をいやすことを目的にした発明品で、バグはたくさんの助手と一緒に大きな工房で忙しい毎日を過ごしていました。
今やバグは時の人でした。

その日バグがくたびれて自分の家に帰ると、一通の手紙がポストに届いていました。
差出人の名前をみると、マグラからでした。
マグラはバグをこの星に連れて来たあと、しばらくバグの面倒を見てくれていました。
おじさんとおばさんに会えないバグにとって、マグラはとてもたよりになる、あたたかい存在でした。
しかし、二年ほど前にマグラはこの星を去ることになり、バグのもとを離れて行きました。
詳しい事情は聞かされませんでしたが、さびしいと思ったのも一瞬で、バグの心はあっという間にまた忙しい毎日に埋もれてゆきました。

そのマグラが去ってから二年、初めてバグのもとに手紙が届いたのです。
不思議に思ったバグは手紙を開けようと手にとりました。
しかし、その日はなんだかとても疲れていたバグは、結局手紙を開けずにそのまま寝てしまいました。

翌日。
急に発明品作りの作業が一時中止になり、バグははやばやと家に帰

ってきました。
ここのところ、発明品を作るのに必要な水の調達が遅れていました。
今日はついに水が入らないということになり、作業が出来なくなったのです。

バグは部屋に帰るとベッドに横になりました。
ベッドサイドのテーブルには、コバルトブルーの万年筆が置かれています。
しかし、この万年筆をバグ自身が使うことはもう長いことありませんでした。
ふと昨日届いていた手紙が気になり、バグは封筒のはしをやぶると手紙を取り出しました。
そして手紙を読みはじめました。

第１１話：星は今・・・

気が付くとすでに窓の外は暗くなり、夜になっていました。
手紙を読み終わったバグは、長いこと呆然としていました。
バグはの頭は突然誰かに強くなぐられたようなショックと、強い痛みでズキズキとしていました。

マグラからの手紙。
そこには、バグの小さな美しい星が今大変な危機にさらされていることが記されていました。
遥か空からあふれ出ているようだった青く美しい滝はもう今はなく、人魚たちの歌声がひびく虹色の滝つぼはもはや荒れ地になっているとのことでした。
それでも何とか水を得ようと大勢の開発者がやってきて、大がかりな工事をしたり土地を掘ったりしたので、空気は汚れ満点の星空は見えなくなりました。
開発が進むと土砂や汚れた水が海に流れ込み、美しかったコバルトブルーの海は、にごってよどんだ灰色になりました。
それもこれも全ては、バグの発明品の使う水を調達するためであったと、マグラの手紙にはかいてありました。
おじさんとおばさんはこの事実をバグには伝えないよう、マグラにずっとお願いしていたのです。
バグに発明を頑張ってほしい一心で・・・

バグの目からは涙があとからあとから流れてきて止まりませんでした。
自分は一体なんということをしてしまったのだろう！
バグは星が、おじさんとおばさんが大好きだったのに。
みんなに喜んでもらうために発明を頑張っていたはずだったのに。

人々を幸せにしたと思って満足して、バグのやってきたことは、星を大変な危機にさらしてしまっていたのです。

バグのショックは言葉にならないほどでした。
しばらく工房を閉めることを伝えると、部屋にこもったきり出てこなくなりました。
流し続けた涙は部屋の床ににぶく輝く水たまりになり、バグの足をぬらしました。

その涙のにぶい輝きを見て、バグは思いました。
何とかしてまた滝を作ることはできないだろうか。
何とかして星をもとの美しい姿に戻すことはできないだろうか・・・。

バグは自分の涙をかつておじさんが星の滝の水を入れてくれたガラスの小さなビンに集めました。
星のために、バグは新たな発明を考え始めたのです。

第１２話：リドの提案

バグは涙を集めて、星の美しい景色を、みんなの笑顔を取り戻すためにある発明品を作りました。
それは、真っ青に透きとおった、こぶしほどの大きさの石のようなかたまりでした。
この青い石は水の力を小さなかたまりに閉じ込めたもので、この石が当たればそこからは美しい水がまた滝のように生まれ始めるはずでした。

その青い石をバグは全部で１０個作りました。
この発明品にバグは星の未来をかけたのです。

バグは念入りに計算に計算をかさね、その青い石が星にあたるように、思いきり飛ばしました。

しかし、遠くはなれたバグの小さな星にこの小さな青い石をあてることは、考えていたよりもずっとむずかしいことでした。
石は１０個のうち、たったの３個しかバグの星にあたりませんでした。
その３個も、バグの計算した通りの場所にはあたらず、バグの期待はくだけ散りました。

もう自分にできることはない・・・。

もう流す涙も枯れ果れたバグのもとに、一人の発明家がやってきました。

その発明家は、リドでした。
バグは懐かしい旧友の訪問に、心があたたかい紅茶にふれたように不思議とほぐれていくのを感じました。
リドはバグを心配したマグラから、バグの星の状況や、バグが星を救うために必死で作った発明品が失敗したことなどを聞いていました。

リドはバグに聞きました。

「きみは本当に星をもとのように戻したいと思っているのかい？」
バグは強く答えました。
「もちろんだ。そのためだったらぼくは何でもする。でももう取り返しがつかないんだ・・・。」
そのバグの強い意志と深い悲しみを感じたリドは、息を少し深く吸うとバグにあることを提案しました。

リドの提案は驚くべきものでした。バグは目を見開いて聞き返しました。
「本当にそんなことができるの？」

リドはしっかりとした、自信のある口調できっぱりと言いました。
「きみが心から望むなら、それは可能だ。」久しぶりに聞いたリドのその言い方が、あまりにリドらしかったので、バグは思わずくすくすと笑ってしまいました。
こんなふうに笑ったのは本当に久しぶりだ、バグは思いました。

バグはリドの提案を受けることを決心しました。
それは、バグの今の生活を、いや、今までの生活を全て失うということを意味していました。

第１３話：最後のきぼう

リドの工房に入ると、そこはバグの工房よりもずっとせまくて助手は一人しかいませんでした。
「ぼくにはこれで十分。満足しているんだ。」
というと、リドは奥の部屋にバグを案内しました。
そこには、深い緑色の布がかぶせられたちょうどバグほどの大きさの何かがありました。
まさかこれが？
バグのいぶかしそうな顔を見て、リドは布を取りました。
するとそこには、見たことも聞いたこともない、卵を大きく大きくしたような真っ白な球状の物体が現れました。
その物体は、リドが長年かけて発明した時間をさかのぼることのできる装置だったのです。

「これが・・・」
バグは言葉を失いました。
リドの提案は、バグの思いもつかなかった驚くべきものでした。
それは、リドが発明したこの装置で過去に戻ってもう一度やりなおしてどうか、というものでした。

「バグ。よく聞いてくれ。」
言葉を失っているバグに、リドは真剣な顔つきで言いました。
「この装置で時間をさかのぼることができるのはたったの一回だけだ。この装置は一回しか耐えることはできない。つまり、時間をさかのぼったらもうここに戻ってくることはできないし、またやり直すことはできないんだ。」
バグはリドの目をまっすぐに見つめました。
「もちろん。覚悟はできている。」

リドは少し肩の力をぬくと、
「そうか。その覚悟があるならいいんだ。」
とめがねを指で少し持ち上げました。

「ただ・・・。」
バグは少し下をむくと、小さな声でリドに聞きました。
「この発明品を世に発表すれば、きみは大変な有名人になる。きっと大きな賞だってもらえる。なのに僕が使ってしまって本当にいいのかな。」
するとリドはきっぱりとこう言い放ちました。

「かまわない。僕は賞を取りたくて発明をしているわけではない。そんなものより、今きみを助けることの方がずっと大事なことなんだ。」

バグはリドのその言葉にショックを受けました。
リドは昔から少しも変わっていない。
いや、こんなに立派な発明家に成長していたんだ。
いつのまにか夢を忘れて変わってしまったのは僕だけだった・・・。

そのことに気がついたバグに、もう迷いはひとかけらもありませんでした。
このリドの発明品は、バグと星にとってもはや残された最後の希望でした。

第１４話：高速船？

バグとリドはまっ白な球状の装置の前で、かたい握手をかわしました。
あとはバグがこの装置の中に入るだけです。

リドの説明によれば、何も持たずにこの中に入り、あとは外からリドが装置の起動スイッチを入れれば過去の時間に戻れるということでした。
その際に、現在のバグの体はおそらく消滅して過去のバグの体の中に戻るだろう、とリドは言いました。
「まあ、ぼくも実際に試したわけじゃないから・・・」
というと、リドはすまなそうにバグを見たので、バグは首を振ってもう一度リドの手をかたくにぎりしめました。
「リド。本当に、本当にありがとう。きみこそが真の発明家だ。ぼくはずっときみを応援しているから。」
するとリドは、少し下をむいて照れたように笑いました。
それは初めて見るリドの笑った顔でした。

バグは言われたとおりに何も持たずに、体一つで装置の中に足を踏み入れました。
さあ、いよいよだ・・・。
バグは緊張してきました。
リドを見ると、その表情もさすがにかたくこわばっていました。
「準備はいいかい？」
リドの問いかけに、バグは無言で静かうなずきました。
装置の扉が閉まり、バグは静寂に包まれました。
透明な窓から外を見ると、リドが起動スイッチを押すところでした。
それを見たバグは、大事なことを聞き忘れていたことに気がつきま

した。
窓をつよく叩いて思いきり大きな声でリドに聞きました。
「いつの時間に戻るの？！」
リドはバグの口の動きで質問の内容がわかったようでした。
口を大きく動かして、リドは一語づつゆっくり答えました。

「キ　ミ　ガ　ノ　ゾ　ム　ト　コ　ロ　ニ　・・・」

その瞬間、バグを強烈な光が包みこみ、ものすごい揺れと衝撃がやってきました。
「うわあああああ！！」
思わずバグは目をつぶって大きな声で叫んでいました。
ものすごい高速船で月にむかって飛んでいるようなかんじってこんなふうなのかな？？
と考えたのもつかの間、バグは何も考えることができなくなり意識が遠のいていきました。

最終話：ぼくの星

永遠のような、まるで一瞬のような、それは不思議な不思議な光のトンネルを猛スピードでつき抜けるとそこは・・・

バグはしばらく自分の身に何がおこったのか理解できませんでした。ただ、意識がぼんやりと戻ってきたバグの目に最初に映ったものは、キラキラと輝くコバルトブルーの海でした。

ああ、きれいだ。
バグは思いました。
ここはぼくの星だ。
大好きな、大好きなおじさんとおばさんとみんなのいる、ぼくの星なんだ。
ぼくは、ぼくは、帰ってこれたんだ・・・。

バグのほほをあたたかいものがつたい、それはキラキラと光りながらコバルトブルーの海に溶けてゆきました。

ふいにバグは自分を見つめる視線を感じ、まわりを見わたしました。すると、バグのとなりにはおじさん釣り糸を垂らしてすわり、バグをやさしいまなざしで見つめていました。
「バグ。この星が好きかい？」
バグはこのやり取りを覚えていました。
そう。マグラが初めて訪ねてきた次の日。
おじさんは別れを予感して元気のないバグを、この美しい海へ釣りに連れてきたのでした。
「バグ。おまえはこの星が好きかい？」
返事をしないバグに、おじさんはおだやかな口調でもう一度たずね

ました。

「もちろん。」

バグの答えはあの時と同じでした。
しかし、あの時とは今は違う。
バグはつづけて答えました。

「おじさん。ぼくはこの星が大好きだよ。だからぼくはずっとここにいる。もう二度とこの星を離れたりはしないし、したくないんだ。」

おじさんはバグの答えに目をどんぐりのようにまんまるにして、ちょっと困ったような顔をしました。
しかし、バグのしっかりとした顔つきとその決意のようなものをみてとると、小さくうなづきました。
「そうかあ。それは残念だ。おまえがこの星を出て立派な発明家になってくれればと思ったんだけどなあ。本当に残念だ！」
そういうおじさんの顔はとてもとてもすがすがしく、心の底からうれしそうに微笑んでいたので、思わずバグはふき出しそうになりました。

本当に、なんて心おだやかなあたたかい時間なのでしょう。
バグが忘れていた気持ちを一瞬で取り戻すことのできる、このあたたかな時間とコバルトブルーの海。
もうじき日が沈んで夜になれば、満天の夜空があらわれるのでしょう。

リドが最後に言っていた言葉。

―きみが望むところに―

そうか。ぼくが望んでいたのはここだったんだ。
この場所に、帰ってきたかったんだ。
これから家に帰ったらおばさんに何て声をかけよう。
やっぱりまずは、
「ただいま。」かな。

気がつくとおじさんは片付けを始めていました。
そしてバグにこう声をかけました。
「さあ、そろそろ家にかえろうか。発明家のバグ先生。」

おじさんとバグは手をつないで、おばさんの待つ家への道を歩き出しました。
バグの手は小さくて、おじさんの手は大きくてあたたかでした。
おじさんはバグに聞きました。
「お前の夢に変わりはないかい？」
バグは答えました。
「もちろん。」
バグの夢は今も昔も変わりません。
みんなを幸せにする発明家になること。
でも、もう二度と方法は間違えない。

刻々とその色を変えていく、この星の夕空。
それを見あげるバグの瞳に、一番星が小さくかがやきました。

最終話：ぼくの星（後書き）

最後まで読んでい頂きました皆様、本当にありがとうございます。
　初めて投稿させて頂いたのですが、つたない文章と乱文でかなり読みづらかったと思います。　少しづつでも成長していけるように頑張りますので、今後ともお付き合い頂ければ嬉しいです。　このあと、１話だけおまけのエピソードをのせようと思っていますので、ぜひそちらも読んで下さいませ♪

おまけのお話

広い広い宇宙のとあるところに、一人の地味な星がいました。
彼にはまだ名前はありません。
彼には友達もいなければ家族もいません。
唯一の楽しみは双眼鏡で他の星ウォッチングをすること。
おそらくどこか未知の星の未知の生命体が落していったと思われる
その双眼鏡が、彼の唯一の宝物でした。
友達のいない彼にとって、この二つの穴から見える様々なものがす
べてでした。

ああ、今日もあの星は何てまぶしく光り輝いているんだろう！
あの星とあの星はまた喧嘩をしてぶつかり合っている・・・。

彼は毎日毎日マイペースにくるくると回りながら色々な世界を見て
います。

そんな彼には、とても気になる存在の星がいました。
今日もその星が見える時間になると、彼はすかさず双眼鏡で二つの
穴をのぞきこみました。

彼の見る先には、一人の小さな小さな星がいました。
その星は青く、ところどころ緑色で、それはそれは美しい星でした。

なんて美しいんだ・・・。

彼はため息をつきました。
そう、彼はその小さな星に恋をしてしまったのです。
しかし、彼女は彼の存在に気がついてはいません。

なぜなら、彼が双眼鏡をのぞいてやっと見えるくらいに彼と彼女の距離は離れているのです。
双眼鏡をもたない彼女が彼の存在に気がつかないことは当然のことでした。

でもあいにく、それは彼にとって幸いなことでもありました。
彼はとても汗っかきで、最近では熱が出たように体温が高く、表面はいつも蒸れたようにじめじめとしていました。
こんな姿を見られてしまうくらいなら、いっそ自分の存在に気付かないでいてくれた方がいいんだろう。
彼はそんなふうに思っていました。

そんなある日。
今日も恋する相手を拝見しようと双眼鏡をのぞきこんだ彼の眼に、みなれない何かが飛び込んできました。
何か、青くて小さな石のようなものが、その星のさらにさらにはるか遠くからこちらの方へむかって飛んでくるではありませんか！

「あれは一体なにものだ？？」

彼が必死に目をこらして見ていると、ついにその青い石は彼女にぶつかってしまいました。
彼は驚きました。
驚きすぎて声もでません。

なんてことだ！
大丈夫なのか？

するとその小さな美しい星の青いところ、おそらくそこには水と呼ばれる液体がおおっている、にぶつかった青い石ははじけて一瞬大

きく盛り上がったように見えました。
それはまるで突然そこに大きな滝が生まれたようなかんじでした。
しかし、しばらくするとそれはまた盛り下がり、何事もなかったかのように落ち着きました。

彼はもんもんとしました。
今のヤツは一体何者なのか？
彼女の身はは安全なのか？
考えると心配で心配で仕方がありません。

ところが。
そんな心配をしていたのもつかの間、またしてもその青い石が彼女をめがけて飛んでくるのが見えたのです。

「！！」

彼は青い石の再びの襲来に声もでないほどショックを受けました。
しかも、今度はなんと次から次へと何個も飛んでくるではありませんか。
彼女を助けたい・・・。
しかしあそこまで行くことは自分には出来ない・・・。
彼は心配で身もよじれんばかりです。

すると、飛んできた石は今度は彼女には当たらずにそのまま素通りしました。

良かった。
これで彼女の身に危険が及ぶことはない。
心から安心した彼ですが、事態は思ったよりも深刻です。
なぜなら。

その青い石は、今度はそのまま彼のほうをめがけて飛んできたのです。
彼とその星の距離は遠くても、その間をさえぎる星は一人もいません。
ということは、このまま石が飛んでくれば今度は彼にぶつかることは必至でした。

しかし彼は、あの小さな美しい星にぶつかるよりは自分にぶつかる方が数百倍もましだ、そう思いました。
自分が彼女を守るんだ。
石くらい何個だって受け止めてみせる。

その青い石は時間差で全部で7個飛んできていました。

もうじき最初の1個目が彼にぶつかります。
しかも彼は少しづつ回っているので、
彼女を見守ることができる時間はあとわずかです。

もうじき彼女が見えなくなってしまうその時、1個目の青い石は彼に激突する寸前でした。

3、2、1・・・

その瞬間、まるでみぞおちに強烈なボディブローをくらったような激しい衝撃が彼の体に走りました。
しかし次の瞬間、今まで感じたことのないものすごい清涼感が広がりました。

「なんだ、このすがすがしさは！」

それは高熱でひどい風邪をひいたようになっている彼の体を、
一瞬で冷やすようなすがすがしさでした。
一体何が起こったのでしょう？
しかし彼には何が起こったのかわかるはずもありませんでした。
なぜなら、彼はびっくりしすぎて気絶してしまっていたのです。

次に目覚めたとき、彼は自分の体の異変に気がつきました。
何だかとてもすがすがしい、この感じはなんだろう？
昨日までのむれた感じはなく、熱がでたように熱くほてっていた体がすがすがしく冷えてる・・・。
彼はおそるおそる自分の体を、と言ってもほんの一部ですが、のぞきこむようにして見てみました。

すると・・・。

彼の体をおおっていたむれた蒸気はなくなり、かわりに青い青い水がおおっていました。

彼は感激しました。
あの小さな美しい星と同じ、青い水が自分の体をおおっている！
なんという奇跡でしょう。

彼は思いました。
きっとこれは恋をした自分に、どこかの誰かがくれた素敵なプレゼントに違いない。
そして嬉しさのあまりに涙をポロポロとこぼしました。
その涙は彼をおおう青い水に静かに溶けていきました。

それからずっとずっと後のこと。
広い広い宇宙にとある一人の星がいました。
彼は緑色で、七つの青い海をもつ、とても美しく生命力に満ちあふれた星でした。
その星を見つめて今日もため息をついている小さな星が一人。
「ああ、あの星。なんて大きくて青くて素敵なんだろう。」
その小さな星はつぶやきました。
手には眼鏡、おそらく近視用、を持ち、それをつけたり外したりしながらお目当てのかっこいい星を見ています。
「ぼくもあんなふうに大きくてきれいでかっこいい星になれたらなあ。よし。こうなったら、この星一番の発明家にお願いでもしてみるか！」
こうして、長い年月を経てとうとう彼と彼（！）は両想いになりました。
二人はその姿が実はひどく似ているということに気がつかず、今日もお互いにあこがれながらくるくるとマイペースに回り続けるのでした。
―おしまい―

おまけのお話（後書き）

海の水がしょっぱいのはそういうことだったのです（笑）
最後までお付き合い下さいました皆様、ありがとうございます。
まだまだ完成度の低い未熟なお話だったと思いますが、ご意見やご感想を頂ければ嬉しいです。
今後も頑張っていきたいと思いますので、ぜひぜひよろしくお願いします。

追伸：私にこのお話を投稿しようと思わせてくれた友人Ａに感謝します。おかげで何とか完結させることが出来ました。ありがとう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2350e/

発明家のバグ

2010年10月10日01時28分発行